

研究報告

文化依存度の高い学びを専攻する滞日外国人留学生の母語ネット接続意識 ー 対面留学 vs オンライン留学に対する考え ー

工藤 昭子

The Attitudes of Foreign Students in Japan Majoring in Culture-Dependent Learning towards Internet Connection in Their Native Language - Thoughts on Face-to-Face Study Abroad vs. Online Study Abroad -

Akiko KUDO

Abstract

The aim of this study was to clarify the differences between studying abroad online and studying abroad in person, and the reasons for and attitudes towards native language Internet connection while studying abroad, for international students who learn in a culturally dependent manner. (1) As a result, they thought that the things that were effective for studying abroad in person were “the environment and human resources and teaching materials necessary for learning, such as practical training, application, and lessons linked to the local environment,” and that “you can only learn by going to the local area.” They also gave positive evaluations of the interpersonal relationships and immediacy of the learning environment in face-to-face learning environments at study abroad destinations, such as “senior-junior relationships”, “being able to ask questions immediately”, “being able to interact with local people and teachers”, and “promoting learning by outputting on a daily basis”. On the other hand, the positive aspects of online study abroad included “suitability for learning content such as knowledge and theory”, “convenience of being able to study anywhere”, and “low cost”. (2) Regarding native language Internet connection, 62% of the respondents thought that it was useful for reducing cultural stress. Another point to consider is that students at N2 level felt that they were unable to speak the language of the country they were staying in as they wished, while students at N1 level and above, and students at N2, and student in between N3 and N2 level, felt that they were not being accepted in a friendly way in the country they were staying in, and that this was connected to internet access in one's native language.

キーワード (Key words) : face-to-face study abroad (対面留学), online study abroad (オンライン留学), native language Internet connection (母語ネット接続), cultural dependence (文化依存度)

I. 問題

ポストコロナ期になってオンライン留学が増加した (e.g. 中村¹⁾, 2023) が, 国境を越えた留学が持つ変革力

の可能性はオンライン化に変わってしまうのだろうか。

例えば, 渡部他²⁾ (2022) によれば, オンライン国際教育交流プログラムの実施により, 外国語運用能力・異文化適応力・行動力の下位項目に対しオンライン留

学前後で自己評価した調査を分析した結果、いずれの項目も有意差が認められ留学後の方が効果量が多かったという報告がなされている。

一方で、対面留学による留学体験やそれによる学びの重要性も注目されている (e.g. 大槻他³⁾, 2024)。その理由は、高等教育における留学生教育では、BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) などの留学効果を測定するテストが教育に取り入れられるようになり、「社会的オープン性」「世界との共鳴」といった項目で対面留学後、効果が急上昇する (中村⁴⁾, 2024) といった具体的報告が認められているからである。

越境した留学生たちが、外国にいながらいつでも母語によるネット接続が可能である現在、対面留学であっても、学ぶ内容 (たとえば語学留学、専攻の中の専門科目) により変化はないのだろうか。以下、先行研究、用語の定義、調査、結論、今後の課題を述べる。

II. 先行研究

2.1 中国人留学生の母国語SNS利用と異文化適応の関係

黄⁵⁾ (2017) は、国内の大学に通う中国人留学生の母国語での SNS 利用、日本人友人との直接連絡、母国のマスメディアからのニュース視聴の時間数とどの言語で視聴するかを質問紙調査した。対面留学している留学生が、渡航先で母国語によりインターネットを利用することで社会文化適応について検討した研究として注目に値する。

利用時間の平均値から母国語の SNS 利用時間が多い群と少ない群、ホスト国の人との連絡頻度の高群と低群、母国語のニュース視聴の高群と低群、最新のニュースを見るとき母国語で見る群と日本語で見る群、国際ニュースへの関心度高群と低群に分けた。分析変数を 2 つ設定した。一つ目は、Berry & Kim⁶⁾ (1988) の理論により JiaQi⁷⁾ (2013) が作成した尺度を使い留学生の母国文化の保持と異文化への同化 (以下「アカルチュレーション」と呼ぶ) を検討した。二つ目は Ward & Kennedy⁸⁾ (1999) の異文化接触での新しい文化に対するスキル、行動力を測定する「社会文化的適応」尺度 (SCAS) を検討した。回答者のメディア利用により分けたグループの差を調査してメディア利用と異文化適応の相関を検討した。その結果、「アカルチュレーション」については、母国語で SNS を利用することは母国文化の保持とポジティブな相関があった。ホスト国の人との連絡高群と低群では、留

生の異文化への同化とポジティブな相関がみられた。母国語のニュース視聴高群と低群の相関をみると、留学生たちの母国文化の保持とポジティブな相関があった。ホスト国の言語によるニュース視聴は留学生の異文化の同化もポジティブな相関があった。最新のニュースを母国語でみる群は母国文化の保持と有意、最新のニュースをホスト国の言語で視聴する群は異文化への同化と有意な相関があった。「社会文化適応」については、ネット上でのホスト国語でのニュース視聴は社会文化的適応とポジティブな相関があった。また国際ニュースへの関心度は社会文化適応とポジティブな相関があることが明らかになった。しかし、この分析は異文化適応の型により自文化維持志向、文化同化志向へのグループ化を試みているに過ぎないともいえる。何のために母語ネット接続 (エスニックメディア) するのかさらなる調査が必要であると思われる。

2.2 日本語学校の中国人留学生の母語ネット接続の効果

工藤⁹⁾ (2022) は、語学留学をしている中国系留学生が渡航先の日本で母語によりインターネットを使用していることがホスト国での留学体験にどのような影響を与えているのかネットにより質問紙調査を実施した。調査対象は関東、近畿、中国地方の日本語学校に在籍する中国系の留学生であった。機縁法により 219 名が回答し、調査に同意しない人を除き 217 名から有効回答を得た。質問は 22 項目あり、調査に同意するか、フェイスシート (来日時期、所属学校の種類、専攻、母語、国籍 (地域)、性別、年齢層、日本語レベル)、いまの学校の志望動機、使用言語の割合 (母語か日本語か) に関する質問、ネット利用に関する質問 (接続時間、留学前後のネット接続時間の変化、ネット接続言語)、関心のある情報 (国内か海外か)、ネット学習と対面学習の違いに関する質問であった。

現在のネットの利用時間についての回答は、1 日に 5 ~ 10 時間が 114 名 (53%)、1 ~ 5 時間が 64 名 (29%) で滞日中国人留学生の 82% 以上が 1 日に 5 時間以上ネットを利用していることがわかった。日本にいながら中国語サイトにつながっていたいか、という質問には「とても」「まあまあ」をあわせると 76% 以上がつながっていたいと答え、なぜそう思うのかという質問 (N = 217, 複数回答可) には、動画を見るため (189 名)、家族と連絡を取り合うため (159 名)、同じ母語友人と交流するため (159 名)、勉強や研究のため (149 名)、日本の情報を知るため (120 名) などであった。日本

において母語でネットにつながる事が日本文化理解に役立つかという質問には、「とても」「まあまあ」をあわせると8割以上が「母語でネットにつながると答え、母語ネット接続が日本文化理解に役立つと考えていることがわかった。

対面留学中の母語ネット接続について、日本文化への適応度が低い人が、過度に母語でSNS利用をすることは日本文化理解の阻害要因になる可能性もある。Maeder-Qian¹⁰⁾(2018)は、ヨーロッパ在住の非英語話者について研究を実施した。対象はドイツ在住の中国人で、ほとんどの参加者が現地の学生ネットワークに参入するのが非常に難しいと感じ、文化的距離感に対する意識が固まっていく様子を報告している。中国国内の様々な地域から来たにも関わらず、彼らは主に中国人滞在者と交流するようになり、共有する国家アイデンティティや標準中国語を通じて言語的アイデンティティに対する意識が高まっていったという事例がある。

ネットが普及している現在、「かつての留学生達のように、母国から離れることにより、人間関係の多くがリセットされてしまうような環境におかれ、母国の文化に接する機会が著しく減少することを余儀なくされるのが当たり前」(黄¹¹⁾, 2016)という留学生生活ではなくなっているともいえる。留学体験の中身はネット普及によりこれからの留学生教育研究の新たなパラダイム転換を迎えていると思われる。

ではどのような分野において対面留学の価値が出るのであろうか。武道、日本料理のような日本文化に紐づいた科目や、スペースを必要とする体を動かすような科目は、対面留学でなければ学びにくいのではないかと考えられる。そこで次に、「ダンス」を科目として対面授業及びオンライン授業を調査した研究をとりあげる。

2.3 授業「ダンス」の対面及びオンライン授業

ーオンライン授業のメリット・デメリットー

留学生を対象とした先行研究ではないが、「身体を使う」授業であり、武道と関係すると思われ、またオンライン授業のメリット・デメリットについて調査しているため向出¹²⁾(2023)を取り上げる。向出は、コロナ禍で幼稚園教諭・保育士志望の学生に「ダンス」の授業を対面(143名)とオンライン(106名)で実施した。「ダンスをすることの内的本質はコミュニケーションである」(松本¹³⁾, 2003)といわれるように、「身

体的コミュニケーションのもっとも本質的な力は人と人との間にある種の「一体感」が醸し出されそれが「共有」される瞬間にこそ立ち現れるのではないか」(菅原・野村¹⁴⁾, 1996)と述べている。対面授業の授業構成は、前回授業の振り返り、本日の授業内容の説明、クラス全体、グループ(7-8人)の活動を行った。オンライン授業の流れは、Google Meetを用い、全体指導、ブレイクアウトルームでグループ活動、クラス全体に戻りグループ発表というものであった。ただし、オンライン授業では「身体の近接・接触を伴う内容、同じ空間を共有しないと成立しづらい内容は省略した」という。例として「即興表現」領域の「鬼の動きを全員がまねながら行い、名探偵はだれが鬼かをあてる」というプログラム名「名探偵ゲーム」や、「ボールや綱があるかのように相手に対応した動きを表現する」というプログラム名「エアキャッチボール」など数個のプログラムがオンラインでは成立しづらく実施できなかったという。オンライン授業のメリット・デメリットは次のようであった。

オンライン授業のメリット

1. 気軽に授業を受けられる
2. 友達の動きを見るのは楽しかった
3. Webでも友達と一緒にダンスの創作ができる
4. 直接的コミュニケーションがないため友達との緊張が少ない
5. 踊る恥ずかしさが軽減できる
6. 伝言したいときはチャットでできる

オンライン授業のデメリット

1. ネット環境に左右される
2. 友達との交友関係が築きにくい
3. コミュニケーションがとりにくい
4. パソコン・スマホの前でダンスはやりにくい
5. 一人でダンスを踊るのは孤独である
6. 画面が小さいなど、友達の顔が見えにくい
7. 自宅ではやる気が持続しにくい
8. 体が全部映らないからダンスがわかりにくい
9. 授業を受けているという臨場感に欠ける

2.4 対面留学とバーチャル対面式の学習環境による差

Davidsonら¹⁵⁾(2023)は、バーチャルと対面式の学習環境における言語的・文化的接触と学習成果の比較調査を実施した。2017-2019年に政府後援の集中イマージョン学習プログラムに参加した米国人L2学習者グループを対象として対面式(N=1388)とバーチャル(N=770)の習熟度結果やパフォーマンスのデータを比較した。その結果、バーチャルグループの参加者はスピーキング能力向上が平均で1レベル低かった。し

かしリーディング、リスニング、ライティングの成果は差がより小さくなり、全く差がない場合もあった。対面式の学生は平均してバーチャルプログラムの学生の（168 時間）の 4 倍以上の時間（696 時間）をコミュニティ活動に費やしていることが示された。バーチャルコースの学生は対面式の学生よりも宿題をこなす時間が週あたりほぼ 2 倍であった。

対面式学習環境で、アカデミック・ディレクターによる毎月開催された対面式の文化円卓会議において、司会者によるグループディスカッション、ロールプレイ、過去の参加者の実際の異文化体験を匿名化したケーススタディが行われ、意見や経験を共有し、その前の週に遭遇した文化的ジレンマを乗り越えるための戦略を練る活動ができた。多面留学でも受け入れ先の取り組みに恵まれればこのような介入もしてもらえるかもしれない。

バーチャル形式はコロナ以降、取り入れているようで、良い点として授業中に気が散らず、非公式な場を WhatsApp や Zoom を使ってホームステイ先の家族と毎週会える。言語パートナーと毎週ミーティングを行えるなど便利さを強調している。

2.5 科目「スポーツ（ラグビー）」を対面留学で学ぶ留学生の日本語教育

スポーツ選手として競技力向上のために練習活動を行うことを主目的として日本に留学しているスポーツ留学生がいる。渡辺¹⁶⁾ (2022) は、外国人スポーツ留学生の一日の学習時間が他の一般的な外国人留学生と比べても少ないことを指摘し、特定のニーズに基づく日本語教育が必要だとしている。外国人スポーツ留学生の部活動競技のラグビーに焦点をあてラグビー情報誌を題材とした語彙リスト作成を学習者と教師が協働で、題材決定、語彙抽出、英語訳の吹き、確認作業と修正を行った。意味分類としては (1) 競技特有のルールやポジション、プレーに関する語、(2) 競技特有の戦術や理論に関する語、(3) スポーツ全般に出現すると思われる語に分類され 136 語の語彙リストを作成した。この研究は、留学生の取り組んでいる作業や作業計画に合ったタスクを教師が理解し、教授法に取り入れて指導することができた事例である。対面留学することで、一般的な日本語教育とは異なる留学生のニーズを教師がよりつかみやすくなり、留学生の個別のニーズに合った日本語教育を受ける環境を得られた事例だといえる。

Ⅲ. 用語の定義

3.1 文化的依存度の高い学びを専攻する外国人留学生

本研究では、このような「来日して学ばなければ学びきれない文化依存度の高い科目を専攻する外国人留学生」を「文化依存度の高い学びを専攻する外国人留学生」と定義し、本研究の対象とした。その国の文化に紐づいた専攻には、高等教育機関である大学では、美術学部、音楽学部、体育学部、栄養学部、文学部などにおいて日本文化に紐づいた専攻があると考えられる。また専門学校においても料理、芸術のコースにおいては日本文化に紐づいた専攻があるだろう。その中から、機縁法により調査可能であった専攻として武道、日本料理を本研究では取り上げる。

3.2 語学留学生

中国人留学生¹⁷⁾ は、日本の留学生の半数弱を占める (JASSO¹⁷⁾, 2022)。中国のネット事情と日本の同事情は異なるという前提は存在するためその影響がある可能性は否めない。しかし、中国人留学生の行動は外国人留学生の半数弱のネット利用の典型的な行動パターンと見て取れる (注 1)。工藤⁹⁾ (2022) は、機縁法により日本語学校で学ぶ中国人留学生約 200 名を対象にしたネット接続に関する調査した。本研究では、中国人語学留学生の行動を語学留学生の半数弱の行動パターンと考えるため、本研究の対象である「文化依存度の高い学びを専攻する外国人留学生」の日本に留学中のネット利用時間数の比較対象群として適当であると考え。そこで、工藤⁹⁾ (2022) の中国人留学生を「語学留学生」と捉えることにした。

Ⅳ. 調査

4.1 研究目的

文化的依存度の高い学びを専攻する外国人留学生が、母語によるネット接続が可能な環境にいながら、日本に対面留学することが、オンライン留学とくらべて、どのように違うと捉えているのかを明らかにすることを目的とする。

4.2 研究方法

4.2.1 対象者

機縁法により、日本で文化的依存度の高い学びを専攻する関東圏および関西圏の外国人留学生（武道、日本料理）を対象とした。回答数は 125 名であったが、

同意したのは124名であったため124名（中国39人、台湾9人、韓国57人、インドネシア6人、マレーシア5人、タイ3人、ベトナム1人、オーストラリア1人）を分析対象とした。日本で文化的依存度の高い学びを専攻する学生は124名、比較対象とする「語学留学生」（工藤⁹⁾、2002）（3.2の「語学留学生」に該当）の回答者は219名であったが調査に同意しない人を除き分析対象者数は217名（中国本土198名、台湾14名、母語が中国語の中華系マレーシア人5名）であった（表1）（注2）。

表1 国（地域）別研究協力者内訳

国（地域）	文化的依存度の高い 学びの留学生数	語学留学生数（工藤, 2022）
中国	39	198
台湾	9	14
マレーシア	5	5
韓国	57	0
インドネシア	6	0
タイ	3	0
ベトナム	1	0
オーストラリア	1	0
合計	124	217

4.2.2 質問紙の構成

質問紙によって評価した項目はフェイスシート（質問項目1～10）、ネット接続時間、ネット接続理由、ネット接続時間の変化とその理由、ネット接続機器、ネット接続も含めた日本語と母語の使用割合、留学前後のネット接続時間の変化、留学中の言語使用の意識（日本語使用と母語使用割合）、留学中の関心意識（日本か母国か）、他者への連絡方法（同国人、日本人）、学びの違い（ネット留学、対面留学）である。質問項目は以下の通りである。

質問項目（選択肢）

- この調査では、留学している学生さんのネットの使用について、その状況やみなさんの考えをうかがいます。選択式の質問が大部分でかかる時間は5分から10分です。調査にご協力いただけますか。（はい・いいえ）
- 学校の種類（専門学校・短大・大学・大学院）
- 一番近い学習分野を教えてください（大学：リベラルアーツ・言語／体育・武道／等。専門学校：調理（日本料理を含む）／等。）
- 来日時期
- いまの学校（学科）の入学年
- 留学期間・予定
- 母国（パスポート発行国）
- 母語（※母語とは日本に来る前、お家で両親や兄弟姉妹との間で使っていた言葉です）

- あなたがいまの学校を選んだ理由（自分のやりたい勉強ができるから、尊敬している先生・指導者がいるから、よく知られた学校だから、母国の先生・親や友人に勧められたから 等）
- あなたの日本語レベルについて教えてください（N1以上、N1-N2、N2、N2-N3、N3、N4以下）（注3）（注4）
- 教室外（プライベート）であなたは一日平均何時間ぐらいネットにつないでいますか
- 教室外（プライベート）では、日本語と母語をどのくらいの割合で使っていますか。友人との会話や利用するネットでの利用言語などが含まれます。（日本語だけ 1～6尺度 母語だけ）
- 教室の外（自宅やカフェ、通学途中など）で利用するサイトやサービスについて一番近い選択肢を選んでください（母国（母語）80％；日本語20％ぐらいです／母国（母語）60％；日本語40％ぐらいです／母国（母語）と日本語のサービスは半分半分です／母国（母語）20％；日本語80％ぐらいです／ほとんど日本（日本語）のサービスです／その他）
- 留学する前と留学してからでは、ネットに使う時間がどのくらい変わりましたか。（増えた／減った／変わらない）
- （増えた）ネットに接続する時間が増えた理由について、上位3つまで順位をつけてください。（1.母国の友人・家族との連絡／2.母国の出来事・イベントを知りたい／3.日本に関して母語で理解したい／4.母国で楽しんでいたゲーム・サービスなどを続けたい／5.母語で勉強した方がはかどる／6.日本の出来事を母国のメディアで理解したい／7.日本で提供されるネットサービスに興味がある／8.日本の友人に勧められた・仲良くなりたい／9.その他）
- （減った）ネットに接続する時間が減った理由について、上位3つまで順位をつけてください。（1.ネット環境がない／2.勉強（座学）が忙しい／3.勉強（実習など）が忙しい／4.アルバイトが忙しい／5.一緒にネットを楽しむ友人が身近にいない／6.そもそもネットは勉強の邪魔になる／7.日本で提供されるネットサービスに興味がない／8.その他）
- あなたが日本在住の同国人の友人と連絡を取るときにもっともよく使う連絡方法を3つまで教えてください（3回答以内）（Facebook／QQ／LINE／Instagram／YouTube／Skype／WeChat／TikTok／Kakao Talk／WhatsApp／E-mail／電話／対面（会って連絡する）／郵便／その他）
- あなたが日本人（先生を含む）と連絡を取るときにもっともよく使う連絡手段を3つまで教えてください（3回答以内）（選択肢は15.と同じ）
- 留学中なら日本語中心に勉強するべきでしょうか、それとも母語や母国の情報を活用した方が留学の成果は上がるでしょうか。あなたの気持ちに一番ふさわしいところを選んでください。（勉強は日本語中心 6尺度 日本でも母語必要）
- 生活面について伺います。日本留学中に日本について深く知りたいですか、それとも母国のことが気になりますか。あなたの気持ちに一番ふさわしいところを選んで下さい（留学中は日本中心に 6尺度 母国の事が気になる）
- 留学先で教室の外（プライベート）で使っている（いた）デバイスを教えてください。（フィーチャーフォン（ガラケー）／スマートフォン（スマホ）／タブレット／ノートパソコン／デスクトップパソコン／ゲーミングパソコン／ワークステーション／個人のデバイスはなし／その他）
- あなたが留学先でネットを使う理由や目的について、順位をつけて回答して下さい。二位、三位はなくても構いませんが、必ず一位の選択肢は選んで下さい。（1.ネットは勉強のために活用します／2.ショッピング、家族との連絡など、生活のためネットを使います／3.ゲームやネット番組視聴などレジャー（息抜き）のためネッ

トを使います /4.その他)

21. ネットには国境がありません。ネットで学ぶことと実際に海外で学ぶのには違いがありますか。あなたの考えを教えてください (自由記述)
22. 留学中の文化的ストレスがあれば選んでください。(ホスト国のことを思うように話せないと感じる / ホスト国では社会的・経済的に立場が弱くなったと感じる / ホスト国で自分が友好的に受け入れられていないと感じる / 同じ文化や同じ母語の人と会う機会が少ないと感じる / 引っ越してきた当初の心理的ストレスが残っていると感じる / わからない から複数回答)
23. 母語ネット接続が文化的ストレス軽減に役立つか (その通りだ を 6 として, 1~6 尺度)

4.2.3 質問紙作成手順

質問項目は工藤⁹⁾(2022), 黄⁵⁾(2017) を参照した。工藤⁹⁾(2022) からは、「現在のネット接続時間」(質問項目 11 番), 「ネット接続する理由」(質問項目 20 番), 「留学前後でネットに接続する時間が変化したか, またその増えた / 減った理由」(質問項目 14 番), 「日本にいながらよく使う他者との連絡方法 (WeChat/LINE など) (同国人, 日本人別)」(質問項目 15, 16 番), 及びフェイスシート (質問項目 1, 2, 4, 7, 9, 10 番) の質問項目を本調査の項目に取り入れることで, 本調査対象の文化依存度の高い科目を学ぶ留学生のインターネット利用行動をとらえようとした。黄⁵⁾(2017) からは「母国語の SNS を平均どのくらいの時間で利用しているか」「ネット上で公開されているニュースを視聴する場合どの言語で視聴しているか」の内容を参考にし, 文化依存度の高い科目を学ぶ留学生の日本語と母語使用の意識について把握すべく, 「教室外では日本語と母語をどのくらいの割合で使っていますか。友人との会話や利用するネットでの利用言語などが含まれます」(選択肢: 日本語だけ~母語だけの 6 尺度で評価) (質問項目 12 番), 「教室の外で利用するサイトやサービスについて一番近いものを選んでください」(選択肢: (母国 (母語) 80%; 日本語 20% くらい / 母国 (母語) 60%; 日本語 40% くらい / 母国 (母語) と日本語のサービスは半分半分 / 母国 (母語) 20%; 日本語 80% くらい / ほとんど日本 (日本語) のサービス / その他) (質問項目 13 番) を本調査の質問項目として取り入れた。

さらに, 文化依存度の高い科目を学ぶ留学生の留学中の関心が母国寄りか留学先の日本寄りか, 使用言語が日本語中心か, 母語も日常生活やネット接続に利用する傾向があるかを把握しやすい構成にするため「留学中は日本語中心に勉強すべきか, それとも母語や母国の情報を利用したほうが留学の成果が上がるか」(質

問項目 17 番), 「留学中に日本について深く知りたいか, 母国のことが気になるか」(質問項目 18 番) を加えた。留学中のストレス, 母語ネット接続がストレス軽減に関係するかの質問も加えた (質問項目 23, 24 番)。またオンライン留学と対面留学のリサーチクエストンに関する質問として, 「ネットで学ぶことと実際に海外で学ぶこと, つまり対面留学することに違いがあると思うか」について自由記述で記載する質問 (質問項目 21 番) を加えた。

インターネットにより回答が可能な REAS (リアルタイム評価支援システム) を用いてアンケートを作成した。アンケートタイトルと調査の目的をまず記載し, 留学生のネット利用についての調査であること, 「この調査の結果は学会や学会の雑誌で報告しますが, みなさんの個人情報が出ることはありません」というプライバシーが守られるという倫理的配慮に関する説明を加えた。質問項目 1 問目で「この調査では, 留学している学生さんのネットの使用について, その状況やみなさんの考えをうかがいます。選択式の質問が大部分でかかる時間は 5 分から 10 分です。調査にご協力いただけますか」を尋ね, 「はい・いいえ」で答えてもらった。「はい」と回答したことで, 調査協力が同意したかを判断できるように作成した。

4.2.4 調査期間

調査期間は 2021 年 12 月~2022 年 1 月であった。

4.2.5 分析方法

分析方法は, 次の通りである。

- ① 「現在の一日平均のネット接続時間」について, 本調査の対象群である文化依存度高い科目を専攻する留学生と, 比較対象群として語学留学生 (工藤⁹⁾, 2022) の人数割合により比較した (注 1)。
- ② 質問項目 12 教室外で日本語と母語をどのくらいの割合で使っているか (日本語だけを 6 とする 1~6 尺度), 質問項目 17 留学中なら日本語中心に勉強すべきか, 母語や母国の情報を活用した方が留学効果が上がるか (勉強は日本語中心が 61~6 尺度), 質問項目 18 留学中に日本について深く知りたいか, 母国のことが気になるか (留学中は日本中心 6, 1~6 尺度) については, 1~3 を選択した人を母語・母国グループ, 4~6 を選択した人を日本語・日本グループに振り分けた。

質問項目 13 教室の外で利用するサイトやサービスについて母語と日本語の使用割合について次の選択肢から選んでもらい, ほとんど母語, 母語 80%; 日本語

20%, 母語 60%; 日本語 40%を選んだ人の割合を日本語・日本グループに振り分け、ほとんど日本語、母語 20%; 日本語 80%, 母語 40%; 日本語 60%を選んだ人の割合を母語・母国グループに振り分けた。本研究では作業用語として母語・母国グループに振り分けられた群を「母国寄り」、日本・日本語グループに振り分けられた群を「日本寄り」と呼ぶ。

③ 質問項目 22 のオンライン留学と対面留学に違いがあるか、考えを自由記述した質的データについては、質的データ分析法（佐藤¹⁸⁾, 2008）注（2）を参考に以下の手順で分析を行った。まず、REAS に記入した自由記述で不明な日本語を除いた。次に、前後の文脈に注意しつつ、ネットで学ぶこと（オンライン留学）と海外で学ぶこと（対面留学）の違いについて述べた内容を要約する形でコードを付与（オープンコーディング）し、そのオープンコードを抽象度の高いコードに選択的に割り振った（焦点的コーディング）。そして抽出されたコード、コード間の関係に留意しつつ、より抽象度の高い上位コード（サブカテゴリー）に置き換える作業を行った。さらに、同様の作業をもう一度行った（カテゴリー）。もう一度大きい上位カテゴリーとしてコアカテゴリーに置き換えた。

4.2.6 倫理的配慮

本研究の倫理的配慮については、国際武道大学研究倫理部会審査による審査を受け承認を得て実施された（審査承認番号：21016）。

V. 結果と考察

5.1 留学前後でネット接続時間に変わったか

「留学の前と後でネット接続時間に変わったか」という質問に対し、文化依存度の高い科目を専攻する外国人留学生にうち 64%が「変わらない」と答えた。増えた人の割合は 16%で、減った人の割合は 17%, 無回答が 3%だった。対面留学してもネット接続のスタイルがあまり変化しないことが考えられた。

接続時間が留学後に増えたと答えた人の理由（複数回答可）のうち最も多かったのが「母国友人・家族との連絡」（80%）, 「日本に関して母語で理解したい」（50%）, 「母国の出来事・イベントを知りたい」（40%）, 「母国で楽しんでいたゲーム・サービスを続けたい」（40%）であった。ネット接続の時間が減ったと答えた人の主な理由は、「勉強（座学）が忙しい」（73%）, 「勉強（実習など）が忙しい」（73%）, 「アルバイトが忙しい」（65%）が上位 3 位を占めた。留学先の環境

に適応してネット接続時間に変化があった学生もいたと考えられる。

5.2 ネット接続時間

文化依存度の高い科目を専攻する外国人留学生のネット接続時間は、0-5 時間が 120 名中 96 名（80.0%）と最も多かった。比較対象群の語学留学生は 228 名中 69 名（30.3%）でこの群では 2 番目に多い時間数であった。ネット接続時間 5-10 時間は文化依存度の高い学びを専攻する留学生は 13.3%と低かったが、語学留学生は 53.9%でこの群で最も多い時間数であった（図 1）。両群でネット接続時間数が異なる理由は、不明であるが、ネット接続が少ない群はネット接続以外にやることがあるためか選好しないためであることが考えられる。

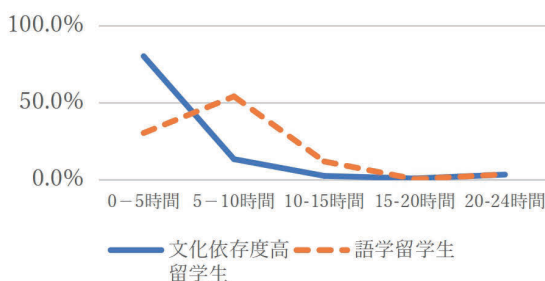


図 1 文化依存度の高い科目を専攻する留学生と語学留学生の 1 日平均ネット接続時間人数割合

5.3 ネットに接続する理由、使用デバイス

本研究の対象群の文化的依存度の高い学びを専攻する留学生に、留学先でネット接続の理由や目的について尋ねたところ、最も多かったのは「勉強のため」（86%）で、次いで「ショッピング、家族との連絡など生活のため」（83%）, 「ゲームやネット番組視聴などレジャー（息抜き）のため」（70%）が上位の理由であった（複数回答可）。

比較対象群の語学留学生（N=217 名、複数回答可）がネットに接続する理由として、最も多かったのは「動画を見るため」（189 名）, 次いで「家族と連絡を取り合うため」（159 名）, 「同じ母語友人と交流するため」（159 名）であった。「勉強や研究のため」は 149 名, 「日本の情報を知るため」が 120 名などであった。

この結果から、5.2 で述べたように両群のネット接続時間は異なるが、ネット接続理由は「家族と連絡」「勉強」「動画視聴」などに多くの学生が回答しており、対面留学する留学生として大きな差はみられないと思

われた。

留学先で使用しているデバイスを探ねたところ、本研究の対象群の文化的依存度の高い学びを専攻する留学生は、スマホ 85%，ノートパソコン 34%，タブレット 29%（複数回答可）が上位 3 つであり、圧倒的にスマホ利用者が多いことがわかった。比較対象群の語学留学生は、スマホ 91.9%，ノートパソコン 67%，タブレット 25.9%（複数回答可）が上位 3 つであった。こちらの使用デバイス上位 3 位とも両群で同じ結果であった。両群とも使用デバイスはスマホが 85%以上と圧倒的に多く、ノートパソコンの利用者の人数割合が語学留学生の方が文化的依存度の高い学びを専攻する留学生よりも約 2 倍多かった。この違いについて、実践や実習が多い本調査の対象群は学習にあまりノートパソコンを使用していない可能性が示唆された。

5.4 留学中の文化的ストレス

文化的依存度の高い学びを専攻する外国人留学生の日本語能力別・留学中の文化ストレス別人数を図 2 にまとめた。

留学中の文化的ストレスの質問の選択肢として次の 6 つを示した。1) 「ホスト国のことばを思うように話せないと感じる」、2) 「ホスト国では社会的・経済的に立場が弱くなったと感じる」、3) 「ホスト国で自分が友好的に受け入れられていないと感じる」、4) 「同じ文化や同じ母語の人と会う機会が少ないと感じる」、5) 「引っ越してきた当初の心理的ストレスが残っていると感じる」、6) 「わからない」から複数回答可能として回答してもらった。日本語能力は「N1 以上」「N1-N2」「N2」「N3-N2」「N3」「N4-N3」「わからない」から自己評価してもらった（日本語レベルについては注 3 参照）。

最も多かったのは N2 レベルの学生の「ホスト国のことばを思うように話せないと感じる」で、次いで N1 以上、N2、N3～N2 レベルでは「ホスト国で自分が友好的に受け入れられていないと感じる」が多かった。

「母語ネット接続が文化的ストレス軽減に役に立つか」という質問に「その通りだ」を 6 として 1～6 の 6 尺度で答えてもらった。その結果、「その通りだ」を表す 4～6 を選んだ人が 62%，「その通りではない」に近い 1～3 を選んだ人が 35%（無回答 2%）で母語ネット接続がストレス緩衝に役立つと答えた人の方が多かった。

N.Park et al¹⁹⁾ (2014) は留学生の母語による SNS 利用がストレスと異文化適応に正の相関があるとしているが、本調査の対象者も母語ネット接続が、勉強、生活、息抜きにも利用されており、ストレス軽減にも役立っている可能性が示唆された。母語ネット接続を促進させる要因として文化的ストレスが関わっている可能性も否定できないと思われる。

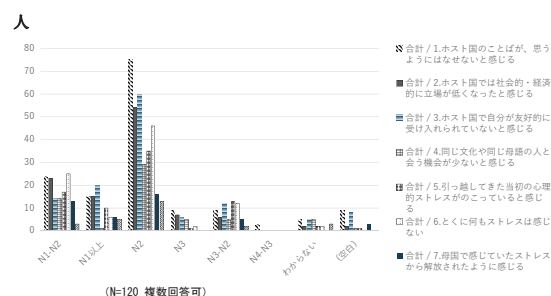


図 2 文化的依存度の高い学びを専攻する留学生の留学中の文化的ストレス

5.5 母語使用意識・勉強の関心が母国寄りか日本寄りか

質問 12「教室外では日本語と母語をどのくらいの割合で使っているか」について「日本語だけ」を 6 として 1～6 の 6 尺度で回答してもらった。質問 17「日本留学中なら日本語中心に勉強するべきか、母語や母国の情報を活用したほうが留学の成果があがるか」について、「勉強は日本語中心」を 6 として 1～6 の 6 尺度で答えてもらった。質問 18「生活面で、日本留学中に日本について深く知りたいか」について「留学中は日本中心に」を 6 として 1～6 の 6 尺度で答えてもらった。質問 13「教室の外で利用するサイトやサービスは日本語が母語か」について選択肢からそれぞれの言語の使用割合を回答してもらった。分析方法②に従い母語・母国グループと日本語・日本グループに振り分けた（図 3）。

その結果、「勉強の言語が日本語中心か」については日本・日本グループの割合が 70%，母語・母語グループの割合が 27%で両グループに 2 倍以上の差があった。「生活で関心のある国（地域）」については日本・日本グループの割合が 75%，母語・母語グループの割合が 22%で両者に 3 倍以上の差があった。「ネット接続言語」については、日本・日本語グループは 24%で母国・母語グループは 73%でこれも両グループに 3 倍以上の差があった。「教室外の言語」は日本・日本グループが 41%，母国・母語グループが 56%で、母国・母語グループの方が多かった。

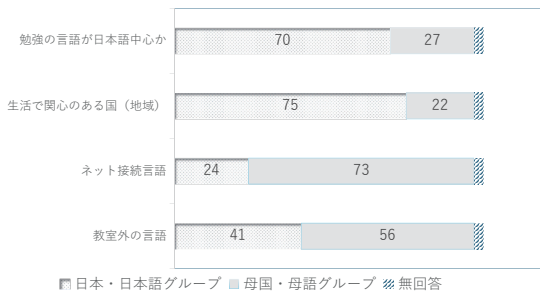


図3 文化的依存度の高い学びを専攻する留学生のネット接続や生活項目の日本グループと母国グループの人数割合

以上のことから、「勉強の言語」「生活の関心」は「日本寄り」であるが、「ネット接続言語」や「教室外の言語」は「母国寄り」といえることが明らかになった。留学中も「母国寄り」である理由について5.4で述べたストレス軽減に役立つことや、黄⁵⁾(2017)が指摘するように母国文化の保持と異文化への同化（「アカルチュレーション」）の中でバランスをとり異文化で「母国文化の保持」をしているからなのではないかと考えられた。

5.6 文化的依存度の高い科目を学ぶ留学生による対面留学、オンライン留学についての考え(自由記述分析)

質問項目22で、オンライン学習と対面学習に対する考えについて自由記述を分析対象にし、分析方法4.2.5②にしたがい分析した結果、3つのコアカテゴリー、11のカテゴリー、31のサブカテゴリー、36の焦点コードが抽出された。コアカテゴリーは<>、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》、

焦点コードは「」と表記した。以下コアカテゴリーごとに説明する。紙面の関係で記載できないがローデータは“ ”で表記した。コアカテゴリーごとに記述する。

1つ目のコアカテゴリー<対面留学が効果的だと思われる内容>（表3）ではまず【実践や実習、稽古を必要とし、現地に紐づいた環境が学習に必要な学習分野】がカテゴリーとして抽出された。《調理の細かい教え、農地での食材選びは対面留学でなければ学べない》というような、実習で細かい教えや食材を見極めたりする学習は対面留学でしかできないという意見があった。2つ目のカテゴリーは【先生にすぐ質問できる環境、先輩・後輩の人間関係の理解促進】が抽出された。《対面留学は現地の人との交流や先生にすぐ質

表3 文化的依存度の高い専門を学ぶ留学生の対面留学の考え

【コアカテゴリー】	【カテゴリー】	【サブカテゴリー】	【焦点コード】
対面留学が効果的だと思われる内容	実践や実習、稽古を必要とし、現地に紐づいた環境が必要な学習分野	料理は対面留学の方が確実に学べる	料理の分野では実際に現地で学んだ方がいい。確実に学べる
		実践や実習分野では対面留学で見つけられることが多い	私の学ぶことが実践や身につけることが大事な（科目な）ので実習できるかできないかが違う
		調理の細かい教え、能智での食材選びは対面留学でなければ学べない	日本でたくさん細かい教え方があるから日本で勉強しなければ学べないことがある。例えば農地を見学し食材を見極める
		剣道は対面留学して本場の日本人学生とたくさん稽古できる	日本人の学生と対戦できる
		対面留学して多くの日本人学生剣道家と対戦し気づきがある	自分の国の剣道のやり方とちょっと違うことに気づく
	先生にすぐ質問できる環境、先輩・後輩の人間関係の理解促進	対面留学は現地の人との交流ができ先生にもすぐ質問できる	海外留学は現地の言語や文化を身につけ、先生や学生と交流できる
		対面留学は実際に海外の人と話せるし質問もすぐに聞ける。もっと勉強になる	海外留学は実際に海外の人と話せるし質問もすぐに聞ける。もっと勉強になる
		先生に質問、他の人との交流（ができる）	先生に質問、他の人との交流（ができる）
	学んだことを毎日アウトプットできる	対面留学してはじめて部活動の先輩・後輩の人間関係を理解した	先輩、後輩の人間関係など留学しなければわからなかった
		対面留学は学んだことを毎日アウトプットできる環境なので習得はやい	毎日学んだことをアウトプットできる
		対面留学し現地の人との交流し方理解	学んだことを速く身につけられる
現地の人との交流を通して自分なりの異文化適応行動	対面留学でコミュニケーションのためのボディランゲージ習得	対面留学し現地の人との交流し方理解	関西弁は現地に来て人と交流して学んだ
		海外ではボディランゲージも学べる。コミュニケーションに必要だった	海外ではボディランゲージも学べる。コミュニケーションに必要だった
	対面留学し現地の人との交流することでホスト国に適応しようとし自分の考え、性格を調整	対面留学し現地の人との交流することでホスト国に適応しようとし自分の考え、性格を調整	ホスト国の文化、習慣、考えを完全に把握するには対面留学が必要。理由はホスト国の生活ができるように自分の性格や考えを調整して適応しようとするから

問できる》、「海外留学は言語や文化を身につけ、先生が学生と交流できる」など交流や質問の即時性に注目した内容が多く確認された。《対面留学してはじめて部活動の先輩、後輩の人間関係を理解した》というサブカテゴリーも抽出され、人間関係の理解も対面留学により促進されることが示唆された。【学んだことを毎日アウトプットできる】【現地の人との交流を通して自分なりの異文化適応行動】のカテゴリーも抽出された。《対面留学し現地の人との交流し方理解》したり、《対面留学でコミュニケーションのためボディランゲージ習得》をしたりした人もいたことが確認された。《対面留学し現地の人との交流しホスト国に適応しようとし自分の考えや性格を調整した》という内面変化も経験も確認された。焦点コードでは「ホスト国の文化、習慣、考えを完全に把握するには対面留学が必要。理由はホスト国の生活ができるように自分の性格や考えを調整して適応しようとするから」が抽出された。これらをまとめると、<対面留学が効果的だと思われる内容>とは、【実践や実習、稽古を必要とし、現地に紐づいた環境が学習に必要な学習分野】、質問の即時性、日本に特徴的な上下関係の人間関係の学び、交流

表 4 文化的依存度の高い専門を学ぶ留学生の対面留学の考え

〈コア カテゴリー〉	【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「焦点コード」
対面留学で 環境の差から 生じた経験、発見、 意識	環境の差を 感じながら 直接体験	対面留学では日本語しか使えない環境	実際の留学では日本語しか使えない
		対面留学では国、周りの人、環境の違いを経験でき、記憶に長く残りやすい	実際の留学はその国と自分の国の差や周りの人や環境の違いを経験できる
		対面留学では見て、感じて、生活を直接体験	周りの環境など直接的経験が多く記憶残りやすく、その国の文化を深く考えるきっかけとなる
		対面留学することで自分の予想を超える経験ができる	実際にホスト国でいろいろなものを見て、感じて、生活を直接体験できる
	自分の認知的 枠組みで学 習や日本文 化・日本社 会で経験	対面留学することで、自分の認知的枠組み学習や日本文化・日本社会での経験ができる	文化は体験しないと意味がない
		対面留学で、文化など予想以上の発見	現地留学だから、知識だけでなく、その国の実際の文化、社会、雰囲気を感じることも大事だ
		対面留学で母国について意識できる	海外留学は雰囲気が違う
			自分の認知的枠組みで経験ができる。五感を使った経験が可能

などで学べる方言、ボディランゲージ、ホスト国へ適用しようとする調整行動の学びだといえよう。

2つ目のコアカテゴリー＜対面留学の環境の差から生じた経験・発見・意識＞（表4）では、【環境の差を感じながら直接経験できる】【自分の認知的枠組みで学習や日本文化・日本社会での経験ができる】【五感を使った経験ができる】【対面留学することで予想以上の経験】【対面留学で母国意識】の4カテゴリーが抽出された。《対面留学では国、周りの人、環境の違いを経験でき、記憶に長く残りやすい》《海外留学（対面留学）は雰囲気が違う》など、環境が変化したことにより様々なことを直接経験できることを前向きにとらえていることがわかった。これらをまとめると、＜対面留学の環境の差から生じた経験・発見・意識＞とは、自分の認知的枠組みで五感を使い、体験、発見できる。そして母国の意識も芽生えるということだといえよう。

3つ目のコアカテゴリーは、文化依存度の高い科目を専攻する留学生の考える＜オンライン留学のメリット・デメリット＞である。1つ目のカテゴリー【オンライン留学のメリット】のサブカテゴリーをみると《テストの点数を上げるのにはいい》《料理分野でも理論だけに限れば学べるかもしれない》《知識分野はオンラインで学べると思う》など、理論、知識分野の学習とテストの点数が結びついたような机上で知識を学習する内容にはオンライン留学は向いているという意見が確認された。また《母語で（オンライン）実施するのらいいと思う》という意見や《費用が安いからいい》

表 5 文化的依存度高の留学生のオンライン留学の考え

〈コア カテゴリー〉	【カテゴリー】	〈サブカテゴリー〉	「焦点コード」
オンライン 留学の メリット・ デメリット	オンライン 留学の メリット	オンラインは生活場所に関係なく学べる	ネットで勉強するのはどこでもできるので便利。 ネットと実際の留学の勉強は知識では、オンラインは生活場所に関係なく学べるが、学びは同じではない。両方経験がらいい。
		オンラインはテストの点数を上げるのにはいい	ネットは自分の点数を考えれば勉強が進む
		オンラインでは、料理分野でも理論だけに限れば学べるかもしれない	料理分野でも理論だけに限ればオンラインでも学べるかもしれない
		知識分野はオンラインで学べると思う	間接的経験や知識はオンラインで学べると思う
	オンライン 留学の デメリット	オンラインは費用が安いのでいい	インターネットではお金がかからないからいい
		オンラインは母語で実施するのらいいと思う	母語でオンラインビデオを学べるならわかりやすいかもしれない。
		オンラインは質問にくい	ネットは質問にくい。
		オンラインは電波により影響を受ける	電波が悪いと勉強できない

《生活場所に関係なく学べる》など便利さ、費用の安さ、外国語を学習しなくても学べるならいいと思うという都合に特化した視点からみた2つ目のカテゴリー【オンライン留学のデメリット】のサブカテゴリーとしては、《質問にくい》《電波により影響を受ける》《知識が身についたかわかりにくい》《自分のペースで学べない》が抽出された。先行研究で見た「ダンス」授業のオンライン授業と対面授業を研究した向出¹²⁾（2023）は、留学生向けの授業ではなかったが、オンライン授業のメリット、デメリットとして参考になる文献である。向出と比較すると、「気軽に授業が受けられる」「ネット環境に左右される」など本研究の調査と重なる部分が見られた。しかし「体全部が映らないからダンスがわかりにくい」のように一定のスペースを必要とする学びはオンラインには向いていないことが示唆される。以上をまとめると、オンライン留学のメリット・デメリットは、オンラインに適した内容やスペースで行われるのであれば授業に適した内容を精査する必要性があることが示された。

Ⅵ. 結論

6.1 研究目的①について

対面留学が効果的だと思われる内容は、「現地でなければ学べない」と考えさせるような「実践や実習、稽古のように現地に紐づいた学習に必要な環境や社会的資源や材料」があるからという非言語行動を含む回答であった。また「すぐに質問できる」「現地の人や先生と交流できる」「学んだことを毎日アウトプット

でき習得促進」といった即時性のある言語行動を伴う学習環境も対面留学で学ぶプラス面の評価として挙げられた。「先輩・後輩の人間関係」のような社会的学習については、対面留学だからこそ気づけた学びであるという回答もあった。「自分の認知的枠組みで物事を認知し経験できる」「五感を使った学びができる」「自分の目で見て予想と違うことの発見ができる」など自分で経験しながら学べるスタイルなども対面留学の効果的な点として挙げられた。

一方、オンライン留学のメリットの回答では、「知識・理論学習など学習内容によっては適している」「場所を選ばず学べる利便性がある」「費用の安さ」などがポジティブに受け止められ、デメリットの回答では「電波により影響を受ける」「知識が身についたかわかりにくい」など環境や指導方法に対し、やや信頼性に欠ける懐疑的な回答がみられた。

以上の結果から、対面留学が経験、即時性、現地の資源や文化に紐づいた学びの環境において優れていると捉えられていることがわかった。またオンライン留学については知識・理論などの学びには利用できるかもしれないとみていることがわかった。今後もオンラインと対面授業のハイブリッド型が注目され、留学もオンライン留学が利便性、経済性の観点から利用されやすくなるかもしれない。しかし、学習の特徴からも日常生活場面などでも、経験豊かな留学のためには、対面留学の方より適した分野がある、ということが明らかになったといえよう。

6.2 研究目的②について

母語ネット接続使用の促進要因として2要因考えられた。一つ目は「母語ネット接続が文化的ストレス軽減に役に立つ」と考える人が62%おり、母語ネット接続がストレス緩衝に役立つ可能性が示唆されていることである。もう一つは、N2レベルの学生が「ホスト国のことばが思うように話せないと感じる」、N1以上、N2、N3～N2レベルでは「ホスト国で自分が友好的に受け入れられていないと感じる」という文化的ストレスを抱えていることがわかり、これらが母語ネット接続や母国寄りの行動を促進する要因となっている可能性が否めないと考えられた。

VII. 今後の課題

本研究の「文化依存度の高い科目を専攻する外国人留学生」は、料理関係、武道関係の限られた対象者に

対してアンケート調査したため、結果には限界があることを認識している。越境した対面留学もネットやハイブリッド授業の導入で今後も変化が見込まれる。オンライン留学、対面留学、ハイブリッド授業のそれぞれの良さや問題点を明らかにし、効果的な母語によるインターネット接続という手法を用いた留学生活と学習面の包摂的見地から複合的に留学生教育について、さらに研究が進む必要があるだろう。

注

- (1) 滞日外国人留学生数の全留学生に占める中国籍学生の割合が2021年時点で47.1% (JASSO¹⁷⁾, 2022) であり、JASSOのHPで確認できる限り、全留学生の約4割以上を常に中国人留学生が占めてきたため留学生の半数弱を代表していると考えられた。
- (2) 調理学校で一般的調理学習の中で日本料理が含まれるコースで学ぶ留学生も含む。
- (3) JLPT (日本語能力試験) とは日本国際教育支援協会と国際交流基金が主催する日本語を母語としない人の日本語の能力を認定する語学試験である。JLPT認定レベルは、日本語能力試験 (JLPT) のホームページ²⁰⁾ による各レベルの認定の目安はN1「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」、N2「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」、N3「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」、N4「基本的な日本語を理解することができる」である。
- (4) 図1の「N2」とはN2に合格した、または合格できるレベルであり、「N1-N2」はN2に合格に相当するレベルであり且つN1の勉強もしたこともあるレベルのことである。自らの日本語能力を「N2」であると過剰に規定しまった留学生がいる可能性は否めない。

引用・参考文献

- 1) 中村絵里他. 2023. 留学とグローバル・コンピテンシーの主観的評価との関連：医療系学生の短期オンライン留学プログラムを事例に、日本教育工学論文誌, 47(4), pp.629-638.
- 2) 渡部由紀・新見有紀子. 2022. ポストコロナ期におけるオンライン留学の役割と可能性. 東北大学高等教養教育・学生支援機構紀要, 8, pp.23-35.
- 3) 大槻有佳子・谷茉莉子・中島貴子・本田勝久. 2024. 国際交流事業と海外留学について -3人の留学体験の

- 語りから－. 千葉大学教育学部研究紀要, 72, pp.305-321.
- 4) 中村絵里. 2024. 短期留学はグローバル市民の育成に寄与するか—分析ツール BEVI を用いた全員留学の評価—. 留学生教育, 29, pp.11-22
 - 5) 黄偉明. 2017. 留学生の SNS 利用. ニュース視聴と異文化適応の相関分析. 現代社会文化研究, 64, pp.89-106.
 - 6) Berry, J.W.& Kim,U. (1988) Acculturation and mental health. in P.R.Dasen, J.W. Berry& N. Sarorius eds., Health and cross-cultural psychology: Toward applications, Newbury Park, Sage, pp.207-236
 - 7) Jia Qi Li, Xun Liu, Tianlan Wei & William Lan (2013) Acculturation, Internet use, and psychological well-being among Chinese international students. Journal of International Students, 3(2), pp.155-166
 - 8) Ward, C., & Kennedy, A. (1999) The measurement of sociocultural adaptation. International Journal of Intercultural Relations, 23(4), pp.659-677.
 - 9) 工藤昭子. 2022. 滞日中国人留学生のインターネット利用に関する研究—Pilot Study アンケート調査より—. 国際武道大学紀要, 38, pp.23-28.
 - 10) Maeder-Qian Jingyue (2018) Intercultural experience and cultural identity reconstruction of multilingual Chinese international students in Germany. Journal of Multilingual and Multicultural Development, 39(7), pp.576-589.
 - 11) 黄偉明. 2016. 留学生のメディア使用と国際報道の授業・異文化適応. 現代社会文化研究, 62, pp.109-125.
 - 12) 向出章子. 2023. 同時双方向型オンラインによるダンスの授業におけるコミュニケーション—対面授業との比較を通して—. 教育学研究論集, 18, pp.32-39.
 - 13) 松本富子. 2003. ダンスのコミュニケーションから何が生まれるか. 女子体育, 45(2), pp.28-29.
 - 14) 菅原和孝・野村雅一 (編). 1996. コミュニケーション学入門—心理・言語・ビジネス. 大修館書店.
 - 15) Davidson D. and Garas N. (2023) What Makes Study Abroad Transformative? Comparing Linguistic and Cultural Contacts and Learning Outcomes in Virtual vs In-Person Contexts. L2 Journal, 2(15), pp.71-91.
 - 16) 渡辺史央. 2022. 外国人スポーツ留学生を対象とした日本語授業の一考察—専門語彙リスト作成とタスクを取り入れた実践—. 高等教育フォーラム, 12, pp.13-24.
 - 17) JASSO 日本学生支援機構. 2022. 2021 (令和 3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果, 外国人留学生在籍状況調査.
https://www.jasso.go.jp/statistics/ryugaku_zaiseiki.html (2025 年 1 月 8 日閲覧).
 - 18) 佐藤郁哉. 2008. 質的データ分析法—原理・方法・実践, 新曜社.
 - 19) Namkee Park, Hayeon Song b., Kwan Min Lee (2014) Social networking sites and other media use, acculturation stress, and psychological well-being among East Asian college students in the United States. Computers in Human Behavior, 36, pp.149-152.
 - 20) 日本語能力試験ホームページ
<https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html> (2025 年 1 月 9 日閲覧).
- * 1) 本研究にご協力いただいた, 専門学校の教職員様と留学生の皆様, 武道系大学の留学生の皆様はこの場を借りて心より感謝申し上げます。
- * 2) 本研究は JSPS 科研費 JP20K20825 の助成を受けたものです。

(2025 年 2 月 14 日 受理)